

「小石川植物園の台風被害(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

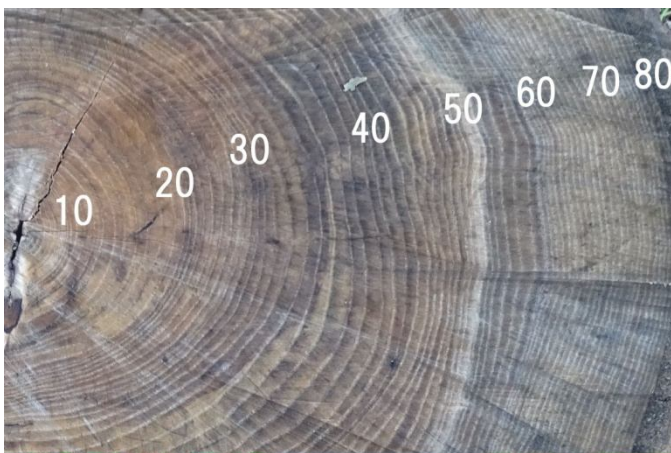
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

内部が赤腐れを起こして、途中から折れて倒れていた菩提樹だが、幹の一部は完全な形で残っていたようだ。その切り口には、実に見事な年輪が残っていた。木の年輪はさまざまなことを物語る。日本のように四季のある環境では、夏と冬の成長速度がちがうので、ほぼ1年に1本の筋ができる。それが年輪だ。



年輪は「木の年齢」以外にも、さまざまな自然環境の情報を記憶している。江戸の大火事を記憶している大木もあるし、寒冷化や温暖化の傾向もわかることもある。屋久杉の年輪の分析で、千年以上も前の天文現象を解明した学者もいる。この木は年輪がほぼ等円心だが、右側の成長が良いので、右が南側なのだろう。



年輪の数を数えてみると、約80本だった。戦前の昭和15年頃芽生えたことになり、私の母とほぼ同い年である。50年前(昭和45年頃)に白い年輪が際立っているが、高度経済成長期と関係があるのだろうか。



切り口の場所によっては、一つの同心円ではなく、いくつもの年輪が複合しているものもあった。まるで天気図の等圧線ようだ。もともと3本だったものが1つの幹に統合してしまったものなのだろう。



私がよくスケッチをする、スズカケノキがある森も、多くの倒木の被害があり、いつもよりもずっと明るく見えた。通り過ぎる他の入園者もそのことに気づいて「あら、この辺明るくなったわね」と言っていた。



私は入園者が少ないことよろしく、道の端に絵の道具を開いて、初秋の森を何枚か描いた。「晩秋」とちがって「初秋」は難しい。まだほとんどの樹木は緑が多く、その中にわずかに色づいた様子が難しいのだ。